

「経営学語」の檻：再考

大阪市立大学准教授

山田仁一郎

いま「経営学語」の普及が目覚ましい。反面、言葉としての使われ方は軽くなる一方である。たとえば、会計学では営利組織と非営利組織の会計原理は異なるのに、本来、非営利組織である大学内で営利の用語が当たり前飛び交っている。これでコミュニケーション不全が起きないのは不思議なくらいだ。

「言語は檻だ」とロラン・バルトはいう。私たち経営学者は日夜、経営学語を磨き上げ、その収集や新語の開発と普及に明け暮れつつ、その言語的定型（エクリチュール）に同時に縛られている。即ち、資本主義ジャングルを司る経営学語の檻の中に私たち自身がいるのも確かだ。それを当然だと受け容れ、各業界用語との共生が生態的に不可欠なことも勘定に入れて、この経営学語の「社会での使われ方」について、さらに検証する必要性を感じるのだ。

たとえば筆者は、「経営学語」族の中でも、アントプレナーシップやベンチャー、産学連携という檻、まだ比較的薄い辞書を編む仕事をしている。この entrepreneur というフランス語から生まれて世界へ普及した用語は、概念的な多様化は進みながらも各国で一定の収束もみせている。ところがわが国では、100年ものあいだ隣接分野も含めて、幾つかの訳出語が依然として使われ続けている（企業者・企業家・起業家等）。そのことに疑問を感じ、大学院生と書誌分析してみると、複数の翻訳語

はおそらく時代の変化を受け、さらに個別領域や学会誌等の媒体毎の継続性にはそれほど拘りなく研究者が用い、移ろってきたようだ。

また筆者は、行政とベンチャー企業と大学がそれぞれ、経営学語で会話する場所にずっと居合わせてきたが、お互いにうまく真意を伝え合えていないことも多い。経営学語は広く使われるようになったが、原理の異なる分野間で互いの本音や利害得失を調整する精度がまだ不十分で、むしろ、内容を貧しく（単に「定型的」に）伝えていないかという反省の念と危惧を覚えている。

さらに、この訳出された経営学語をこのまま日本語という土壌に用いて研究し、教育する環境がいいのかと、近頃は国境を越えた能力主義的社会編成の要請のもと、問い直しの声も大きくなった。一昔前はドイツ語や英語から翻訳し、現地語を日本語の世界に元々あった伝統的商いの和語や寸法に互換した。また先人たちは日本発の概念を世界市場へ発信し、グローバルな「経営学語辞書」に重要な知的遺産を残している。現地語と普遍語の狭間に揺れる日本語の経営学語は、日本学術会議で教養科目の1つと数えられるようになったが、その未来はこれからいかに描かれるべきか。

先日、数百年間の科学関連の書籍の流通変化を世界全体で眺める機会があった。英米語の台頭の前までは、意外なほど、イタリアーフラン

スードイツ語が、その覇権をシーソーのように繰り返していた。言語や学問は、人を自由にも不自由にもする。境界を超えてビジネスを行う人々にとって信頼し合えるための語彙であればなおさら切実な問題だ。人は言語という檻を使い、檻の中の住人同士が協働できるのなら、その檻ごと人間も転がって窮地から脱出することさえ可能なのだろう（映画『Pirates of Caribbean: At World's End』2007年、抱腹絶倒のワンシーンを想起されたい）。

半世紀を越え、組織学会の独自性は、複合的な領域間で「社会科学の総合理論」という理念を掲げ、『組織科学』などを媒体に自国に根ざすことにこだわって、現代の営利・非営利組織の問題を実証的に掘り下げてきたと思う。しかし、この学会のビジョンの中で、経営学語も日本語もすでに唯一の檻ではないかもしれない。多様なディシプリンの理論を重ね合わせながら、組織の創造や成長・存続を祝福し、その消滅を看取って骨を拾う。様々な境界を超えてその意義を与え、吊うことや組織の群生や生態の動態まで見届けることで、持続可能な社会の土壌を耕す。経営学者として経営学語を育てる仕事は、この混沌とした世界の黄昏と夜の中で異なるセクターの間の溝の理解の架け橋となるものでありたい。そのように学問や言葉を心底信じて、机に向かい、教壇に立ち続けたいのだ。